

日中友好よ、永遠に

吉川 春子

中国帰国者支援に取り組んで

日本の侵略戦争の傷跡は中国にとってはもちろんの事、日本人民にとっても痛ましいものですが、満蒙開拓団の悲劇は私はとても他人事とは思えません。私は、いわゆる残留孤児といわれる方々と同世代なのです。そして私が3歳から小学校卒業まで過ごした長野県は、満蒙開拓団として全国一、大勢の県民を送り出し、その半数の人々は再び祖国の地を踏むことはできなかつたのです。

1985年に参議院議員になった私は、中国残留孤児の方々の帰国や日本語の習得、就職などについて十分な対策を取るようたびたび国会で政府を追及してきました。そして坂本伊佐治官房長官に「満蒙開拓団は国策であった、開拓団の方々には苦勞かけてすまなかつた」と謝罪をさせました。

また、終戦当時13歳以上であった方々は、自分の意思で中国に残つたとされ、帰国支援も全く不十分でした。このいわゆる中国残留婦人12人が、93年9月5日、突然に、日本への永住帰国をもとめて成田空港に降り立ちました。翌日私は、所沢の中国帰国孤児定着促進センターへ飛んで行って皆さんのご要求を伺い、厚生省を私の国会事務所に呼んで対策を講じてもらいました。

中島多鶴さんとの出会い

私は中国残留孤児・婦人の要求を政府に対策を取らせる活動を行う中で、泰阜村の中島多鶴さんと知りあいました。中島さんは自らも満蒙開拓団の一員として家族をあげて旧満州にわたり戦後の引き上げでは家族ばらばらになって単身で帰国されました。手書きの満州の地図で私に逃避行の生々しい経験を語ってくださいました。その経験から残留婦人の帰国やその後の生活支援に尽力し、何十回も訪中されています。80歳を超えた今も、NHKの取材のために訪中するなどその精力的活動はとてもまねができません。

中島多鶴さんから私は泰阜村の満蒙開拓団の碑へも案内してもらいました。そして「方正の日本人公墓に共産党の現役国会議員が参っていないのでは」とご指摘を受けました。

多くの方が眠っている彼の地にいつかは行かねばと思っていました。何とか時間を作りたいと思っていましたが、ようやくチャンスに恵まれたというわけです。2006年夏、私は国会議員としてモンゴル友好議連一行とウランバートルを訪問し雄大な草原に遊びモンゴル国の大統領など要人にお会いした後、単身で北京に向かいました。そこで瀬古由起子元衆議院議員、有馬正秀秘書、二男の豊と落ち合つて中国東北地方へ向かいました。チチハルで毒ガスの調査、鉄嶺でハンセン施設跡を調査して最後にこの度の第一の目的地であるハルビンの方正県方正鎮に向かいました。以下当時の日記から引用します。

旧満蒙開拓団の公墓へ

8月11日金曜日、8時ホテル発、今回の中国訪問の最大の目的地である「満蒙開拓団」で犠牲になり現地で眠る人々の墓のある方正（ほうまさ）鎮へ。高速道路を走ること2時間、方正市の出口に到着、地方人民政府の人々の出迎えを受ける。人民政府の車の先導で

約一時間走る。物の本で読み聞かされていた方正の町は、落ち着いた地方都市という感じで、にぎやか。ここで六十一年前、日本人にとって地獄絵が展開された。

庁舎に到着。新築間もないきれいな建物の大会議室のスクリーンには、大きく「吉川春子参議院議員一行歓迎」の文字がパワーポイントを使って示されていた。迎えてくれたのは、ハルビン市方正県人民政府外事弁公室主任・王偉新、張国文・人民政府副市長、田文武さん、通訳の結紅萌さんであった。大きな会議室テーブルには果物とお茶が用意されていた。

張さんは次のような歓迎の挨拶をした。

「友人の仲間に対し方正人民政府を代表して歓迎する。長年の交流の結果、日本、方正双方にとってそれぞれの地が第二の故郷になった。方正県の人民は日本で生活している。多くの日本人に対して、方正県の人々が豊かな心を持って恨みに代えてもてなした。中日国交正常化の後、方正と日本は特別の血縁を結んだ。80年代以来16回の日本への訪問活動を行った。今年も別の訪中団を受け入れた。吉川さんは長年中日友好の往来のために貢献された。今日の方正は、日本の投資の受け入れのための建設を進めている。

これから日本人の公墓に行けばその様子が見られる。日本の有識者が方正を訪問するように、皆さんがこの様子を伝えてほしい。黒龍江省随一の、投資者（日本企業）により政策を検討している。日本人にいろいろの便宜を提供している。日本人の多くの人に方正にくるように伝えてほしい。日本政府の支持と力添えを得られるように伝えてほしい。交流友好訪問を通じて経済発展がかなうように。」と。

方正（ほうまさ）は、中国東北地方の他の地域と同じように、満蒙開拓団の悲劇が起きた場所であった。1945年8月15日、終戦直後北部のジャムス市から1万数千人の開拓民が逃避行でハルビンを経て日本への帰国船の出るコロ島を目指した。山道で、歩いてきて、食料もなくばたばたと倒れたという。その通過点が方正であったとのこと。開拓団本部に1万人くらいの難民が収容された。真夏であり3分の1の4千人～5千人が亡くなった。1万人の3分の1は列車でコロ島へ行った。

（しかし列車に乗ると危険だとの風評が流れ、空のまま列車だけが走り去った。その結果、歩行による逃避行となり、より多くの命が失われる結果となった、と私は聞いている）

冬の間には病気で多数が死亡した。春になって雪が解けて人骨が多数露出した（私は4000柱と聞いている）。骨を残留孤児・婦人たちが集めた。方正人民政府は文書を作って中央政府に「敵の骨ではあるが、出して公墓をつくりたい」との申請を行った。周恩来は「日本人民もまた日本軍国主義の犠牲者である」と墓の建立を認めたという。

毎年多くの日本人関係者が墓参りに訪問する。私は最多の「満蒙開拓団」を送り出し、多くの犠牲者を出した長野県人の国会議員として、初めて方正を訪問した。墓標の前で、集団自決前に歌ったであろう、「ふるさと”か”信濃の国”を歌いたいと思って来たが、心の中でも、声に出してでも歌える状況ではなかった。言葉が出なかった。

中国政府が日本人を手厚く葬ってお墓を立派に管理してくれることに感謝したい。小泉総理も靖国神社参拝を行うと強気だが、一度方正に行くべきだ。

「日本人民も被害者だ」と言うことを中国で度々聞いた。日本の国民も無意識にそう思っていないだろうか。しかし、国民の多くが戦争に反対したら指導者だけでは戦争はできない。日本国の方向を誤らしめない人物を政治家に選ぶ、国民一人一人が本当にしっかりしなければならないときだ。

方正鎮は人口6万人、方正県は23万人、そのうち4万人くらいが満蒙開拓団ゆかりの人だという。訪中前に現地で懇談できる日本人はいないか、日中友好協会が探してくれたが「皆帰国し、養父母は亡くなり、いない」といわれていた。

当地に来て分かったのは残留婦人のお年寄りが一人いるが認知症とのこと。しかし私たちを案内してくれた県職員は妻が残留孤児2世で、妻は日本に帰国しているとのこと。自分は公務員で仕事があり日本には行けないと。祖母から当時の苦勞話を聞いたという。

長野県泰阜（やすおか）村の協力で、小学校を建てたと聞いていたので立ち寄った。1000人の児童が学ぶと言うきれいな学校であった。方正県と泰阜村は姉妹関係にある。

30分ほど車を走らせると大きな蓮の咲いている池がある。中国の規模はどこも大きいのが驚くほどの広さである。盛りは過ぎていたがピンクの大きな花が咲いていた。そこで長野県から来たという残留孤児2世という人に出会った。私も長野県出身だというと、懐かしそうだった。

お米の栽培も日本人（1912生まれ）が指導した水田が広がる。おいしいお米を昼食にいただいた。あちこちに絆が残っている。平和の絆として発展させてゆきたい。ハルビンの中心を流れ、ロシアのアムール川に注ぐ松花江という大きな川は、幼子が流された悲劇の川であった。ホテルの窓から見下ろすと夏休みを楽しむらしい子どもが泥水（清流とはいえない）の中泳いでいた。（以上当時の日記より）

平和な世界へ日本の責任

私は「慰安婦」問題に取り組んでいます。朝鮮半島や中国各地から少女や若い女性を何十万人も拉致し、「慰安婦」にした日本政府は責任を回避しようとしています。しかし、国際的本流は、戦争違法化、人権保護の方向です。今、アジア諸国のみならず欧米からも、また国連やILO（国際労働機構）からも繰り返し、「日本は過去と向き合って『慰安婦』問題の責任を取れ」という勧告を突き付けられています。

ひとたび戦争を起こせばその傷は癒えるまでに数十年から100年以上の歳月を要します。その影響はもっと長く尾を引くでしょう。いつも犠牲になるのは弱い人々、女性、子どもです。絶対に戦争を引き起こさない、日本国憲法をあくまで守る、そのことを私は方正県の日本人公墓に眠る方々にかたく誓ってきました。

<よしかわ・はるこ：1940年東京生れ、埼玉県八潮市議1期を経て参議院議員4期24年。参議院環境委員長、PKO、政治改革等の特別委理事歴任。自衛隊海外派兵、郵政民営化、女性の深夜業規制撤廃などで活躍してきた>